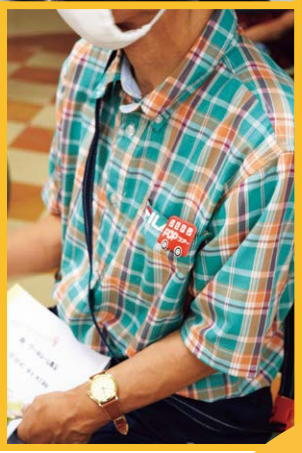
ASAHI GAWASOU DAYORI



「バスに乗らないバス旅行」荘内3施設で実施（3面に関連記事）

旭川荘だより

vol. 264

2021.11.1 発行

CONTENTS

P2 施設のホームページ相次ぎ開設
P4 ヒノキのたまごアートプロジェクト始まる
P6 施設の枠越え、秋祭り合同開催
P7 前島でいかだ乗りに挑戦
P8 ライオンズクラブよりタオル寄贈

発行／社会福祉法人 旭川荘
〒703-8555 岡山市北区祇園866
TEL 086-275-0131 FAX 086-275-5640
https://www.asahigawasou.or.jp

むすびの園に設置された新しいガーデンテーブルとイス（5面に関連記事）

世界に誇れる“伴走者”を目指して

理事長　末光　茂

新型コロナ禍のなか、東京五輪とパラリンピックが開催されました。

パラリンピックは「多様性と調和」をテーマに、世界162カ国・地域と難民選手団から約4,400人の障害者アスリートが参加。視覚障害や身体障害等を抱えての水泳、車いすバスケットボール、卓球など、トータル22競技539種目に分かれての熱戦。日本人の活躍ぶりが連日報道され、車いすテニスの国枝慎吾選手（37）の優勝をはじめ、快挙が続きました。

旭川荘でもなじみの深いボッチャの個人（脳性まひBC2）で、杉村英孝選手（39）が優勝を決めた最後の一投は見事で、何度も何度もテレビで放映され、感動を呼びました。

私が唯一、テレビ観戦できたのは、最終日のマラソンです。

女子の視覚障害T12で道下美里さん（44）が3時間0分50秒で優勝。伴走者の青山由佳さんと志田淳さんを「世界一の伴走者」と称えた言葉に、感銘を受けました。

力不足で足を引っ張らないよう、伴走者には障害のあるアスリート以上の力が必要です。かと言って前に出て強引に引っ張るようなことがあってはなりません。心身両面の余裕が求められます。その点で2人の歩幅、ペース、呼吸がぴったりと合い、一体となった走りは、実に見事でした。

一方で、66歳の西島美保子さんは、途中で脚にけいれんが何度も来たようです。ゴール近くの日本橋の高架橋下で、ついに歩道脇のガードの鉄柵に両手をかけ、脚の屈伸運動を繰り返します。その間、伴走者は手を貸すこと無く、側でじっと見守ることしかできません。手を出せずひたすら見守る苦しさが伝わってきます。

ようやく再度走り出しましたが、前かがみで今にも右側に倒れかねないような姿勢でした。やっとゴールできて、ホッとしたものです。

我々医療福祉職員にとっても、利用者が主役です。職員は世界に誇れる“伴走者”でありたい。そう教えられました。

施設の魅力発信　ホームページ相次いで開設
いんべ通園、あおば、総合在支

いんべ通園センター、あおば、川﨑祐宣記念総合在宅支援センターが施設独自のホームページ（HP）を開設しました。

いんべ通園センターでは施設利用を考えている人へ、施設の活動や利用者の賑やかな雰囲気、支援内容などが伝えられればと7月にHPを公開。あまりページ数を増やさず、タブレットやスマートフォンから見やすいようにしました。「おしらせ」で日常の出来事や行事を取り上げ随時更新。「ピックアップ」には長年就労継続支援事業で取り組むバンガラ作業や、施設の方針を伝えるメッセージなど、おしらせとは分けて紹介したい話題を掲載しています。掲載内容は職員間で頻繁に相談し、その都度担当を決めます。吉本信介支援課長は「担当を1人に決めず皆で行うことで、更新を意識することができる。最新の情報を伝え続けていきたい」と話します。

いんべ通園センターのHPとQRコード

あおばでは、新型コロナウイルスの影響で昨年からバザーなどがなくなったことから、製品をPRし、販売につなげようと6月にHPを立ち上げました。今後は製品の他、日々の活動や生活介護の利用者が作った作品なども掲載していく予定です。「利用者のご家族やB型事業所で働きたいと考えている人にも、あおばの雰囲気を伝えられれば」と黒住卓副所長は話します。本年度からインスタグラムも始め、合わせてあおばの魅力を発信しています。

川﨑祐宣記念総合在宅支援センターでも、福祉サービスの利用を希望する人やケアマネージャーにわかりやすく業務内容を伝えようと8月にHPを開設。支援風景の写真を載せてセンター内の4つの事務所の活動を紹介しています。本田順子所長は「今後、お知らせや求人などを入れられるように改良できれば」と話しています。

あおばのHPのQRコード

川﨑祐宣記念総合在宅支援センターのHPのQRコード

「バスに乗らないバス旅行」満喫 仮想ツアー　荘内3施設で実施

出発前に“シートベルト装着”＝吉備ワークホーム

バスガイドの案内を聞きながら観光地の映像を鑑賞する「バスに乗らないバス旅行」が9月中に荘内3施設で行われ、利用者らが仮想のバスツアーを体験しました。

下電観光バス(岡山市北区厚生町)が、コロナ禍で外出が難しい高齢者、障害者向けに、ガイドとのコミュニケーションを楽しみつつ旅行気分を味わってもらおうと企画。第一弾は倉敷美観地区から源平合戦の古戦場で知られる倉敷市藤戸地区、繊維の町・児島を経て鷲羽山を巡るコースで、9月から県内の高齢者施設などでも同様の仮想ツアーを行っています。

9月18日に吉備ワークホームで実施したツアーには、利用者、職員23人が参加。地域の歴史や耳寄り情報を紹介するベテランガイド籔下美智留さんの名調子に耳を傾けながら、スクリーンに映し出される車窓からの眺めに見入っていました。終盤には実際のバスツアーでも見られない、上空からドローン撮影した迫力ある瀬戸大橋の映像などもあり、短時間に見所をおさえた仮想ならではのツアーを満喫しました。

あおばでも9月11日と25日に実施し、利用者と職員合わせて42人が参加しました。11日のツアーでは、ほとんどの利用者がスクリーンの映像にくぎ付けに。途中、籔下さんの歌に合わせて手拍子や足踏みなどで身体を動かすリラックスタイムもあり、利用者は「よかった」「楽しかった」と満足した表情を見せていました。

このほか、せとうち旭川荘でも9月27日にツアーが行われ、利用者と職員49人が楽しい時間を過ごしました。

「ここ知っとる!」観光地の映像を見て喜ぶ利用者＝あおば

観光案内を聞きながらスクリーンに見入る＝せとうち旭川荘

浴室改修し介護用浴槽導入 いんべ通園センター

本年度新規事業となっていた、いんべ通園センターの浴室の改修工事が10月4日に完了し、リフトを備えた介護用浴槽を導入。重症心身障害の利用者にも安心して入浴サービスを提供できるようになりました。

これまでは旧来の広い浴槽に入浴補助リフトを設置し使用していましたが、肩までお湯につかれませんでした。また、体を洗う場所が狭く、職員の介護負担が大きいものでした。その他、タイル張りで寒く、浴室が暗いことなどいくつか改善したい点がありました。

新しい浴槽はリフト上に横になった状態で体を洗い、そのまま入浴できる一人用の機械浴。浴室もピンクの床と白の壁に変え、温かみのある明るい空間に生まれ変わりました。改修にあたり職員間でバリアフリーや脱衣所との開口部の広さ、動線を意識した使いやすさなどについて、検討を重ねました。

長壽厚志所長は「重症心身障害の方の入浴環境を整えることができたので、短期入所棟の浴槽と併せてさまざまな方の入浴ニーズに応えていきたい。今後は地域で暮らす身体が不自由な方たちにも日帰り入浴などを提供できれば」と活用に意欲を見せます。

リフト付きの浴槽が設置された明るい浴室

コロナに負けない!アートプロジェクト第2弾

ヒノキのたまごアートプロジェクト 利用者、職員938人参加へ

岡山県産のヒノキ材から生まれた卵型のオブジェに彩色する「ヒノキのたまごアートプロジェクト」が9月からスタートしました。新型コロナウイルス感染症の早期終息を願い、素焼きの招き猫に絵付けをした、昨年の「福ねこ」に続く「コロナに負けない!アートプロジェクト」の第2弾。荘内29施設から938人分(利用者713人、職員225人)の参加申し込みがあり、11月12日の締め切りに向けて、各施設で作品の制作を進めています。

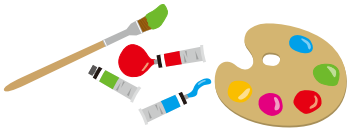
アート作品の素材となる「ヒノキのたまご」は旭川荘真庭地域センターで製造。卵型に削った無垢の端材を、利用者がサンドペーパーを使って表面が滑らかになるまで磨き、今回のプロジェクト用に吊るして展示できるよう、金属製のフックを付けました。

938個のヒノキのたまごは10月11日の週に真庭から本部に到着。アートギャラリーを通じて翌週末までに順次、参加を希望する施設に配布を終えました。

かえで寮では10月21日、利用者6人が芸術活動の時間を使ってヒノキのたまごを色付けしました。たまごは作業しやすいように、菓子箱などの土台にフックを挿して固定。アクリル絵の具やポスターカラーマーカーを使って、カラフルな色を塗り重ねたり、たまごを顔に見立てて目鼻を描いたり、それぞれに創作の一時を楽しみました。

また、結びの杜ホーム、グループホームよしい川でも10月26日に作品制作を行いました。結びの杜ホームではこの日、入居者5人が活動に参加。職員や周りの参加者と会話を楽しみながら、ヒノキのたまごを「干支の寅」「宇宙」など各自のイメージに合わせてアクリル絵の具やスパンコールで飾り、独創的な作品を仕上げていました。

ヒノキのたまごアートプロジェクト実行委員会では、締め切り日までに応募のあった作品を審査し、優秀作品を表彰。全作品を一堂に並べる展示会を年内に祇園地区で開催するほか、各支部での巡回展も予定しています。



卵の彩色というと、よく知られているのが「イースターエッグ」。イースターはイエス・キリストが処刑されて3日目に復活したことを祝う祭りで、「復活祭」とも呼ばれています。卵はキリスト教では「生命誕生の象徴」とされ、イースターでは命を表す卵をきれいにペイントして飾る習わしがあります。

今回の「ヒノキのたまごアートプロジェクト」は「イースターエッグ」に倣い、利用者と職員が卵型のオブジェを題材にオリジナルのアート作品を制作。創作する楽しみ、鑑賞する楽しみを分かち合いながら「コロナ禍からの早い復活」を願うという企画です。

ヒノキのたまごを磨き上げた真庭地域センターの利用者

ヒノキのたまごアートプロジェクト実行委員会

- 旭川荘アートギャラリー
- 旭川荘美術活動振興委員会
- 企画広報室
- 旭川荘新型コロナウイルス肺炎対策本部

それぞれの施設で作品制作に取り組むアートプロジェクトの参加者

かえで寮

結びの杜ホーム

グループホームよしい川

県立大生が真庭地域センター訪問 間プロジェクト　利用者と交流

岡山県立大学デザイン学部の学生たちが9月17日、旭川荘真庭地域センターを訪れ、ヒノキ材を使った製品制作の現場を見学。利用者と一緒に作業を体験するなど交流しました。

同学部南川茂樹教授のゼミと旭川荘との間で、2014年から行っている「間プロジェクト」(★注)の活動。真庭地域センターとの交流は昨年度から始まり、現在の4年生3人が就労継続支援B型事業所「みずき」のロゴを制作するとともに、製品や事業所の魅力を伝えるパンフレットの作成を進めています。

この日、同センターを訪れたのは南川教授と、本年度から同プロジェクトに参加している3年生3人。一行は尾上俊太郎所長の案内で施設内を巡り、みずきの作業部屋では利用者に教わりながら、ヒノキ材の木片を紙やすりで磨き上げる作業に取り組みました。

この後、真庭地域センターが本年度の活動テーマに挙げていた「端材や使用済みの馬の蹄鉄を活用した製品開発」に対し、学生たちは「でんでん太鼓と、だるま落とし＆輪投げを兼ねた玩具」(高橋優海さん)「蹄鉄とアルミパイプを組み合わせた風鈴」(池田あかりさん)「蹄鉄を持ち手に組み込んだワイヤー籠」(松藤桜さん)などに作り上げるアイデアを、試作や映像素材を示しながら披露しました。

同プロジェクトでは例年、①年度初めの施設見学②テーマについて授業で検討③提案の発表、といった流れで進めていましたが、本年度は新型コロナウイルスの感染拡大により5月に予定していた①の見学が延期になっていました。南川教授は「提案に対し利用者さんがどう関わってもらえるか想像しながら検討せざるを得なかったが、今回の交流を通して、学生たちももう少し詳しいことが理解できたと思う。真庭の皆さんの意見もいただきながら提案をブラッシュアップしたい」と話しています。

みずきの作業部屋で利用者(右端)と交流。中央は南川教授

★注:間プロジェクトとは
南川教授が授業の中で進める「福祉現場におけるデザインの効果と新たな価値の創造を探る」取り組み。ものづくりの施設が抱える新製品の開発やPR面の課題などをデザインを学ぶ学生の視点で検討、施設に提案している。

端材や蹄鉄を活用した製品化のアイデアを発表した

むすびの園のテーブルセット新調 旭川荘友の会が寄贈

祇園地区のむすびの園に10月15日、新しいガーデンテーブルとイスが設置されました。

以前からあったテーブルセットの老朽化に伴い更新したもので、旭川荘友の会から寄付をいただき4セット購入。テーブル、イスともに雨風に強く、水抜けのいいメッシュ状のスチール製で、ダークグレーの落ち着いた色合いがウッドデッキや周囲の緑と調和しています。

車いすの利用に配慮し、テーブルの1辺を空けて、それぞれイスを3脚ずつ配置。サービスセンターでは「利用者の散歩の際などに活用してほしい」と呼びかけています。

メッシュ状のスチール製で耐久性も十分

フレッシュマン
－Newcomer introduction－

利用者さんとの関わり大切に

旭川敬老園　介護福祉士　太田　実梨さん（23歳）

利用者の話になると笑顔になる太田さん

「子どもの頃から同居しているおじいちゃん、おばあちゃんが好きで、福祉の道に興味を持ちました」と優しい顔で話す太田さん。今春、旭川荘に入職し、特別養護老人ホーム旭川敬老園で介護福祉士として働いています。

岡山市出身で、進学した岡山県立大学では保健福祉学部保健福祉学科で社会福祉士を目指し、さらにせっかく同じ大学で勉強できるならと2年生からは介護コースを専攻し、介護福祉士についても学びました。長期休暇の度にさまざまな福祉施設に実習に行き、現場を体験する中で「より介護の仕事に惹かれ、介護の施設で働きたい」と思うようになりました。

旭川荘へは県内2番目に歴史のある介護施設があるということで、多くのノウハウを吸収できればと就職を決めました。初めのころは心に余裕もなく、やらないといけないことと、時間に追われる日々でした。そんなある日、利用者から「どしたん？今日、元気ねえが」と声をかけられ「はっとした」と言います。自分でも疲れていることに気付いてなかった太田さんに声をかけてくれたのです。それ以来、「自分のことを気にかけてくれる利用者さんたちに、いつも元気な姿を見せたい」と心掛けるようになりました。

最近では新入居の人のアセスメントを任されたり、委員会でケーススタディをして看護師やOT・PTなど多職種の人たちと関わり、多様な考え方を学んだりしながら、1人1人と向き合うことができるようになってきました。利用者にも業務の合間に積極的に声をかけ「少しずつ、その人の好きなことがわかるようになってきた」と笑顔を見せます。

「日々の繰り返しだけでなく、散歩に行くとか買い物に行くとか。ちょっとした“いつもと違う時間”を作っていけたら」と利用者との関わりに前向きで「高校で茶道部だった経験を生かして、いつかみんなでお茶会をしてみたい」と意欲を語ります。

施設の枠越え、秋祭り合同開催
竜ノ口寮、吉備ワークホーム

竜ノ口寮と吉備ワークホームが合同開催する秋祭りが10月15日、竜ノ口寮南側駐車場で行われました。施設の枠を越えた共同企画は一昨年に始まり、昨年はコロナ禍で中止になったことから2年ぶりの開催。祭りの名称も今回から「竜吉（たつき）せせらぎまつり」となり、会場で披露されました。

竜ノ口寮では長年、秋の行事として「秋桜祭」を実施。吉備ワークの職員が手芸品などの店を出し、祭りの盛り上げに協力していました。災害時の避難や防犯面からも「隣り合う施設同士、協力関係を深めていきたい」と、2019年の「秋桜祭」は企画段階から吉備ワークの職員も加わり、初の合同開催が実現しました。

今回、秋祭りの開催にあたり、竜ノ口寮のイメージが強い「秋桜祭」を新たな名称に変更することになり、両施設の利用者、職員から募集。5案の中から、投票で「竜吉せせらぎまつり」に決定しました。

この日の秋祭り開会式で、竜ノ口寮の中町真也寮長が「今後も2施設でできることを考えていきたい。今日は楽しんでください」と挨拶。建物2階から「竜吉せせらぎまつり」の看板が降ろされると、大きな拍手が湧き起こりました。

祭りは感染症対策のため、参加者はマスクを着用。トモニーやわかば寮などの模擬店出店者にはワクチン接種の完了を確認し、買い物の時間を前後半に分け、食事を各施設ですることで会場が密にならないよう工夫しました。そのため利用者も安心して買い物ができ、吉備ワークの利用者は「買い物ができる機会がないから嬉しい。デザートにプリンを買いたい」と声を弾ませていました。

吉備ワークの三宅律子所長は「天候にも恵まれ、久々のイベントで利用者の皆さんも気分転換ができたと思う。今後も交流を深めていきたい」と話しています。

模擬店で好みのパンを買う利用者たち

倉敷市民吹奏楽団の演奏も行われた祭り会場

前島でいかだ乗りに挑戦 カレッジ旭川荘1、2年生

カレッジ旭川荘の1、2年生17人が、9月30日に日帰りで瀬戸内市の前島に行き、いかだ乗り体験に参加しました。今回のいかだ乗り体験の目的は、仲間と力を合わせて協力すること、そしてカレッジ生同士の親睦を深めることでした。

いかだ乗り本番に向け、7月からグループに分かれて、コロナ対策をしながら乗り降りの練習、パドルの漕ぎ方の練習を行って少しずつチームワークを高め、また、ウオーキング等で基礎体力をつけて、本番に備えました。

新型コロナウイルスの感染状況や台風の接近により、中止の心配もありましたが、何とか実施することになり、1、2年生も一安心。当日朝、マイクロバス1台と乗用車1台で、牛窓港へ向けて出発。フェリーで前島に渡り、牛窓研修センターカリヨンハウスに到着しました。この日のカリヨンハウスは他団体の予約もなくカレッジのみの利用で、食堂や更衣室等もコロナ対策に備えていました。

昼食後にはいかだ乗りの説明を受け、いよいよ本番。少し風のある瀬戸内海に向け、職員を含めた4人グループ、5艇のいかだが出航しました。

最初は怖がる人もいて、チームの呼吸もバラバラでまっすぐ前に進めず、ぐるぐる回ったり、反対方向へ行ったりしてしまいかだも…。しかし、少しずつ練習してきたことを思い出し、呼吸を合わせて漕げるようになってきました。

呼吸を合わせて「1、2!1、2!」沖のブイを目指します

折り返しポイントとなる沖のブイを目指し、出発地点まで戻るのにおよそ40分。最後はもう疲れ果てた人もいましたが、チームメンバーの「あと少し!」「がんばろう!」の声かけで、全てのいかだが帰ってくることができました。

コロナ禍でいろいろな制限のある中、カレッジ内ではできない貴重な体験ができ、参加した1、2年生の充実した笑顔が見られた1日でした。

（カレッジ旭川荘　岡田光生）

余裕も出てきてみんなでピース

無事にゴールに到着！

リレーコラム

声を形に

旭川荘は以前より研究活動を続けており、毎年年末に行われる医療福祉学会は今年で39回を数えます。学会の取り仕切りや成果をまとめた研究年報の作成など、旭川荘総合研究所が担っています。私は研究所にも所属しており、今興味をもっているテーマは、「知的障がいがある人、本人の声の見える化」です。

厚生労働省のホームページにて、平成17年に「障害のある当事者からのメッセージ」という題で意見の募集がなされました。視覚、聴覚言語、知的、精神等、各障害分野から1,011人の応募があり、資料としてまとめられています。それを見て驚いたのが知的障害のある本人の応募はわずか1人（0.1％）、代弁者48人（4.7％）という状況でした。もっと本人の声を聞き取る努力が必要であると感じました。

旭川荘総合研究所は現在、文部科学省の正式な研究機関として平成30年より認められ、文部科学省の科学研究費助成事業に応募できるようになりました。令和3年度においては「新型コロナウイルスが知的障害者施設にもたらした影響の学際的及び国際的研究」と「知的障害者による支援者評価に関する研究」2件が採択されました。私は後者の研究を進めています。

利用者・ご家族の皆様、各施設におきましては研究のご協力を、何卒よろしくお願いいたします。個々の小さき声を力のあるものにするために。

（広報委員　長壽厚志）

ライオンズクラブよりタオル寄贈

岡山中央ライオンズクラブ（LC）など6団体から10月6日、タオルを3,840枚寄贈していただきました。今回で14回目となります。

タオルの寄贈は2009年に岡山ひかりLCが始め、2回目以降は岡山操山LC、岡山京山LC、岡山中央LCも参加。2006年からは岡山せとうちLCも加わり、今年からおかやまMOMO LCも参加となりました。

資料館で行われた贈呈式には各LCの代表者6人が出席し、目録を末光茂理事長へ手渡しました。末光理事長は「長年にわたって旭川荘に心を寄せて、タオルを寄贈してくださりありがたい」と感謝を述べました。

いただいたタオルは本部のある祇園地区をはじめ、ひらた、備中、備前、愛媛支部の24施設に配布し使用させていただきます。

タオルを受け取る末光理事長（右から2番目）

旭川荘理事会・評議員会報告

令和3年度第3回理事会は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から10月上旬に書面開催で行い、令和3年度主要事業の状況、令和3年度第1次資金収支補正予算、評議員候補者の推薦、諸規程の一部改正など8件の議案について、理事及び監事全員の同意等により、原案どおり承認されました。

また、令和3年度第2回評議員会は10月18日、ホテルグランヴィア岡山（岡山市北区駅元町）にて対面方式で開催し、いずれの案件も評議員全員の同意を得て、原案どおり承認されました。

なお、評議員の河野治広氏が10月11日付で退任し、新たな評議員として10月12日開催の評議員選任委員会で山本憲世氏が選任されました。

旭川荘ごよみ
SCHEDULE CALENDAR

11月

10日　旭川荘創立記念式典（永年勤続表彰式）… 旭川荘
20日　秋の清掃活動 …… 祇園地区
☆　秋祭り・日帰り旅行　～各施設

12月

2～3日　旭川荘医療福祉学会（オンライン開催）…… 旭川荘
☆　クリスマス会・餅つき　～各施設

理容美容組合よりタオル寄贈 かえで寮、たかはし障害者支援センター

岡山県理容生活衛生同業組合から9月13日、かえで寮とたかはし障害者支援センターへタオルを寄贈していただきました。かえで寮は昨年に続き2回目、同センターは初めてになります。

タオルの寄贈は全国理容生活衛生同業組合が定めた9月第2月曜日の「理容ボランティアの日」に合わせて、岡山ブロック青年部、高梁支部の代表がそれぞれの寮を訪れ行われました。

かえで寮には約400枚のタオルをいただきました。岡山ブロック青年部の皆さんには2009年から2019年までは毎年この日に散髪ボランティアをしてくださっていましたが、コロナ禍で利用者との交流が難しくなった昨年から、タオルの寄贈というかたちでご支援をいただいています。

また、同センターへはタオル約300枚と箱ティッシュを60箱いただきました。いただいたタオルとティッシュは備中地区の施設に配布し、使わせていただきます。

かえで寮にタオルを贈る
岡山ブロック青年部の代表（左2人）

川上一夫所長にタオルとティッシュを手渡す高梁支部の皆さん（左3人）

訂正

旭川荘だより263号8面「福祉の職場、小中学生がオンラインで体験」の文中の「岡山県社会福祉協会」は、正しくは「岡山県社会福祉協議会」でした。訂正してお詫びいたします。

編集後記

先日、娘の保育園で運動会が開催されました。今回は密を防ぐため2学年ずつに分かれており、場所にも心にも余裕を持って観覧することができました。昨年の運動会はコロナの影響で中止になり、2年ぶりの我が子の成長した姿といろんな想いが重なり、終始涙が止まりませんでした。無事運動会が開催できたこと、また先生方の配慮に心から感謝しています。　（広報委員　岡本智子）